



複合動詞の日中対照研究 ― 学習者の習得状況および両言語の対応する表現に基づいて ―

金, 蘭

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2015-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6151号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006151>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



要 旨

日本語には「動詞＋動詞」の複合形態が特に豊富で、単純動詞と比べ、豊かな表現ができると言われている。ところがそのような複合動詞は日本語学習者にとって習得困難である。なお、語彙習得において学習者の母語の影響が根強く残ると言われている。中国語にも複合動詞はあるが日本語と一対一に対応するわけではない。従って、学習者の誤用の原因を考える上でも両言語の相違点を示す必要がある。そこで、本研究では次のようなことを考察の目標とした。

1. 複合動詞の従来の分類、予備調査で明らかになったことを踏まえ、日本語教育の観点から複合動詞に関する新たな分類を提案する。
2. 日本語の複合動詞に対応する中国語にはどのような表現があるかを考察し、対応関係をまとめる。
3. 学習者にとって習得しにくい、習得困難な複合動詞はどのようなものかを考察し、具体的な習得状況を調べる。
4. 両言語の対応する表現と学習者の習得困難点を踏まえ、対照分析する。
5. 日本語教育において、複合動詞の習得をどのように支援していけば良いのかを示す。

まず、日本語の複合動詞の結合条件や意味分類に関する先行研究、中国語の複合動詞に関する先行研究、日本語学習者の習得に関する先行研究を整理し、問題点を示した(第2章)。本研究の理論的枠組みとなる森田(1994)、姫野(1999)の複合動詞の分類および修士論文で行った調査を踏まえ、日本語教育の観点から以下のような5つの複合動詞の新しい分類を提案した(第3章)。

【タイプ1】前項動詞あるいは後項動詞が単純動詞として使われる際の意味と変化がない複合動詞(飛び立つ、持ち歩く、押し出す、読み始めるなど)

【タイプ2】後項動詞が単純動詞として使われる際の意味から文法的な意味に変化した複合動詞(降り出す、読み切るなど)

【タイプ3】前項動詞または後項動詞が単純動詞として使われる際の意味から抽象的な意味に変化した複合動詞(踏み切る、結びつくなど)

【タイプ4】後項動詞が単純動詞として使われないもので、接辞化している複合動詞(眠り込む、乗り込むなど)

【タイプ5】単純動詞として使われる際の意味から変化し、前項、後項ともに元の意味の手がかりがなく、慣用句的な意味を持っている複合動詞(落ち着く、取り成すなど)

次に、日本語の複合動詞に対応する中国語の表現について構成要素の面と意味関係の面から考察を行った。分析対象として、村上春樹の小説『風の歌を聴け』とその中国語訳版(林少華訳)を取り上げ、取り出した複合動詞336語(異なり語数242語)に対応する中国語表現について考察を行った(第4章)。

そして、学習者の習得しにくい複合動詞はどのようなもので、習得状況はどのようなものかについて考察した。まず「複合動詞の前項と後項について各々の変化の度合いが大きければ大きいほど学習者の習得はそれに応じて難しくなる」という仮説を立て、上級レベルの学習者30名を対象に複合動詞に関する意識調査、文産出テスト、日中翻訳テスト、フォローアップ調査を実施し仮説を検証した。また、学習者の産出された文、翻訳、フォローアップ調査、対応する中国語の表現をもとに誤用分析を行うことにより、学習者にとって習得しにくい複合動詞はどのようなものなのか、具体的な習得状況はどのようなものかを明らかにした(第5章)。

更に、習得状況・対応する表現に基づいた具体的な分析を行った結果、以下のことが明らかになった(第6章)。

- i. 前項動詞あるいは後項動詞の片方の意味を捉える傾向があり、主に中国語で並列関係、補述関係で対応する複合動詞
- ii. 前項動詞あるいは後項動詞を含む他の複合動詞と混同しやすく、中国語で「副詞的修飾語＋動詞」、補述関係で対応する複合動詞
- iii. 「取り巻く」、「詰め込む」などの意味推測、「出し抜く」、「打ち切る」のような漢字の組み合わせで理解するといった誤用の傾向があり、主に中国語ではフレーズ表現に対応する複合動詞
- iv. タイプ①からタイプ⑤の順に学習者は習得困難度が増し、多様な誤用が見られ、産出と翻訳の間の正答率の差も大きくなる。

最後に、日本語教育現場への応用を目指し、日本語教育機関で日本語教師15名を対象に複合動詞教育の現状調査を行った。教師の複合動詞観、複合動詞指導観や今回の一連の調査結果と考察を踏まえ、日本語教育への提言を行った(第7章)。

論文審査の結果の要旨

氏 名	金 額		
論文題目	複合動詞の日中対照研究 —学習者の習得状況および両言語の対応する表現に基づいて—		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	委員長	教授	田 中 順 子
	委 員	教 授	林 博 司
	委 員	准教授	齊 藤 美 穂
	委 員	流通科学大学 客員研究員	中 西 泰 洋
	委 員		
要 旨			
複合動詞は単純動詞と比べ、細かいニュアンスを表すことができ、それを用いることによって豊かな表現をする事が可能であり、その種類の豊富さ、使用頻度の高さは日本語の特徴の一つと言われている。しかし、同時に、複合動詞は日本語学習者にとって習得が困難な項目の一つでもある。本論文は、日本語学習者の立場から、理論面だけでなく日本語教育という実践面を重視し、複合動詞中でも最も生産性の高い「動詞＋動詞」型に焦点を当てて、新しい分類法を提案し、学習者の習得状況を調べて学習困難点を抽出し、それを踏まえて日本語教育においてその習得をどのように支援すればいいのかを明らかにしようとしたものである。本論文の大きな特徴—独創性—は、(1)極めて実証的である、(2)先行研究を把握した上で独自の分類法を提案したこと、(3)母語の干渉という学習上の問題点を明らかにするため中国語との比較・対照を丁寧に行ったこと、の三点である。まず(1)の点であるが、まず予備調査として、複合動詞の後項を「～出す」と「～切る」に限定した<文産出テスト>と<日中翻訳テスト>を、中国在住の中国語母語話者で中上級レベル			

の日本語学習者 53 名に対して行い、本調査として、様々な前項、後項を持つ複合動詞について<文産出テスト>、<日中翻訳テスト>、<テスト終了後アンケート>を中国在住の中国語母語話者で日本語能力試験N1の合格者 30 名に対して行ったことから実証性が伺える。(2)の点について言えば、先行研究を踏まえながらも、あくまで日本語教育の観点から、単独動詞として用いられた動詞とそれが複合動詞の要素として用いられたときの意味の変化に注目して、その度合いに応じてタイプ1からタイプ5までの五つのタイプに分類したことがあげられる。(3)については、日本語の複合動詞に対応する中国語の表現（複合動詞とは限らない）を丹念に調べ、どのケースに誤用が多いのか、即ち習得困難かを明らかにしたことがあげられる。

本論文は全8章から成っている。第1章は序論であり、本研究の背景、目的、方法が述べられている。第2章は先行研究の概観である。第1節で日本語の複合動詞の先行研究がその長所・短所のコメントと共に紹介されており、次の第3章への伏線になっている。第2節では中国語について、複合語全体の概観と、その中での複合動詞についての先行研究が紹介されている。第3章では第2章を踏まえて、特に日本語習得の難易度の観点から、先に述べたように、単独動詞が複合動詞の前項あるいは後項の要素として用いられた時の意味の変化に基づいて次の五つのタイプ分けが提案されている。タイプ1：前項動詞、後項動詞とも単独動詞として使われる際の意味から変化がないもの、タイプ2：後項動詞が文法的な意味に変化したもの、タイプ3：前項動詞或いは後項動詞が抽象的な意味に変化したもの、タイプ4：後項動詞が単純動詞としては用いられず一種の接辞化しているもの、タイプ5：前項動詞、後項動詞とも元の意味の手掛かりが無く、全体として慣用的な意味をもっているもの、となっている。このタイプ分けは日本語学で行われてきた理論的分類（例えば、統語的複合動詞、語彙的複合動詞の区別）より、学習者の習得しやすさという基準を重視したもので、この分類によって、学習困難度や誤用の現れ方がうまく説明できると筆者は主張している。第4章は日本語複合動詞に対応する中国語の表現について、構成要素のカテゴリーの面と意味関係の面から、対応関係を調べたものである。この章は先ほどの第2章第2節と共に、第6章の伏線になっている。第5章では、中国語母語話者の日本語学習者 30 名を対象にした本調査の結果と分析が述べられている。そこでは、第3章で提案された5分類に基づく「前項と後項について各々の変化の度合いが大きいほど習得は難しくなる」という仮説が概ね検証されたことが示されている。また、複合動詞についての学習者の意識に関するアンケートの回答の詳細な分析も行われている。第6章では、調査で用いられた 30 語の一つ一つについて誤用分析を行い、次のような結論を導いている。(1)前項あるいは後項の片方だけの意味で全体を捉える誤用があり、これには中国語の並列関係、補述関係を表す複合動詞が対応している。(2)共通の前項あるいは後項を含む他の複合動詞と混同する誤用が見られる。これには中国語の、構成的には「副詞的修飾語＋動詞」表現が対応し、意味的には補述関係を表す複合動詞が対応している。(3)日本語複合動詞に含まれる漢字を抽出して自分で組み合わせて間違った複合動詞を作る誤用がある。これらの誤用は構成的には中国語の「フレーズ表現」に起因するとしている。以上を踏まえて、第7章では日本語教育に対する提言が述べられ、第8章では、まとめと反省

点が述べられている。

各章間のつながりがやや悪いこと、日中対照が個々のケースに留まって体系的な考察がやや不十分なこと、五つのタイプ分け以外の要因への目配りがやや希薄なこと、などまだ改善の余地はあるものの、本論文は実証的かつ独創的な研究であることは間違いない。本研究は日本語の複合動詞についてその習得の困難さに結びつく要因を研究したものであり、日本語教育における複合動詞の習得について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって本委員会は全員一致で、学位申請者金蘭氏は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

なお、金蘭氏は以下の論文を含む4編の論文（全て査読付き）を公刊している。

- ・金蘭(2012)「中国人日本語学習者における「～出す」、「～切る」型複合動詞の習得について―意識と使用傾向の面から―」、『日語日文学研究』80-1、pp.133-153、韓国日語日文学會
- ・金蘭(2012)「日・中・韓国語における複合動詞の比較」、『日本語文化研究』、第二輯（上）、pp. 147-154、中国・延边大学出版社